

Title	アメリカ憲法における人間の尊厳論（憲法研究：共同研究報告）
Author(s)	松田, 寿美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-3 : 14-15
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2647
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archive

【憲法研究】
アメリカ憲法における人間の尊厳論

2010年10月4日(月)、聖学院本部新館2階集会室にて、本年度第5回憲法研究会が20名の参加の下に開催された。講演者は、筑波大学法科大学院教授の青柳幸一氏をお迎えして、上記の表題についての発表を頂いた。概要は以下の通りである。

青柳氏によると、憲法を論じるには「人間の尊厳ありき」と言う概念で、先ず二つの人間の尊厳論「義務基底的人間の尊厳論」、「権利基底的人間の尊厳論」について定義し、ドイツ基本法1条1項の「権利保障機能と権利規約機能」、「絶対的補償」、「内容に関する抽象的次元でのコンセンサ



「アメリカ憲法における人間の尊厳論」と題する発表があった。

ス」を冒頭に、形而上学で人間性を捉えているとドイツの場合を、それに引き続きアメリカの事例を提示して論じられた。

次に、「アメリカ立憲主義の形成」について、独立を支えた思想・背景・学説の動向の観点から、第一期（1970年代後半まで）、第二期（1970年代後半から）、第三期（1980年代から）の三つの時代区分をして論じられた。「アメリカ立法主義の背景」については、(1) Lockeの権利論、(2) 共和主義、(3) ピューリタニズムに分類して進め、その後、「イギリス立憲主義からの概説」で閉じられた。

更に、「リベラリズム」、「連邦最高判例における権利の言説と義務の言説」について論じれ、むすびとして、「G.W.Bush前大統領の人間の尊厳論の見解を示された。

最後に質疑応答では、「すべての人間の人格」「ピューリタニズム」などの論点を中心に、活発な論議がかわされた。

（文責：松田寿美子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年10月5日、聖学院本部新館2階）